レンガドックかわら版

第5号
2014.4.1

産業遺産と浦賀の歴史と今を伝える広報誌

レンガドック

走水水源地煉瓦(れんが)造貯水池（国登録有形文化財）

旧横須賀海軍ドック群

写真：米山 淳一

Contents

02 イベントリポート 1
産業遺産見学会 ―ドックを底から見上げる―
連載 チラリ **ドック見学会** ―盤木編―

03 イベントリポート 2
写真展「浦賀ドックと浦賀のまち」

04 イベントリポート 3
横須賀の近代歴史遺産 ―日本の誇り体感シンポジウム―

06 連載 うらが今昔⑤
大黒屋 臼井儀兵衛

07 連載 ドックのお話⑤
昔、ドックで働いていた方へインタビュー

08 連載
うらうら散歩

浦賀ドックには

歴史的価値の高いレンガドックをはじめ、産業遺産が集積しています。

レンガドック

レンガ造のドックは日本に2基しか存在しません。もう1つの川間ドックは現在ゲート（扉船）が開放され海と一体になっているため、ドライドックとしての形を残すものは、浦賀ドックが日本で唯一となります。

産業遺産見学会

～ドックを底から見上げる～

平成25（2013）年7月27日（土）に浦賀ドックで「第37回レンガドック活用イベント『ドックを底から見上げる』」を開催し、166名の参加がありました。

今回はレンガドックの「底」まで下りる特別な見学会です。約100年にわたり青函連絡船や軍艦などたくさんの船が修理されたレンガドックで、歴史の流れを感じる内容となりました。

見学の前に説明を受けて
見学会スタート

クレーンをくぐって
いよいよドックの底へ

11㍍の深さがあります

底からドックの大きさを実感！

写真1

写真2

チラリ ドック見学会 盤木編

レンガドックの底に下りると、整然と並ぶ盤木（ばんぎ）の様子を見学できます。盤木はドックの中に入る船を支え、傷つけないための土台です。鉄筋コンクリートの塊の上に樫木（かたぎ）を乗せ、鉄のくさびのようなもので留めています（写真1）。樫木の材質には、樫、ナラなどが使われています。

盤木の重量は1つが約2～3㌧と大変重いため、移動させる時はフォークリフトやクレーンを使いました。そのため、フォークリフトの爪やワイヤを掛けるための穴が開いています（写真2）。しゃがんでのぞいてみると、はるか先の盤木の穴まで見通せます。それだけきちんと整列して動かされているのが分かります。

盤木は船型に合わせ、中央と両脇に置かれます。小さい船の場合には、中央の1列と直径30㌢の丸太を両方の犬走り（ドックの両側の壁）から船の外壁へと渡し、つっかえ棒のように安定させていました。昔は船が入渠（にゅうきょ）する時、船のビット（係留柱）にワイヤをかけ、両側から数人で引っ張って微調整したそうです。

整斉と並んだ盤木からは、東京湾フェリーの『しらはま丸』を修理した時の配置の面影がうかがえます。

写真展「浦賀ドックと浦賀のまち」

展示の様子

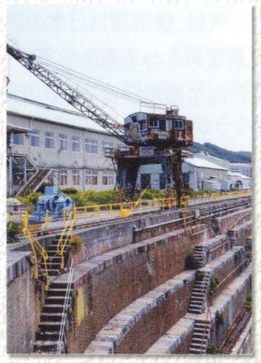
「第38回レンガドック活用イベント（次ページで紹介）」のプレイベントとして、平成25（2013）年10月1日（火）～11日（金）に浦賀コミュニティセンターで写真展を開催しました。

“浦賀ドック”または“浦賀のまち”をテーマに「ストーリー組み写真」と「写真川柳」の2部門で作品を募集し、24点の応募がありました。ご応募いただいた皆さん、ありがとうございました。ここでは、その一部を紹介します。

ストーリー組み写真

（敬称略）

「巨大ドックを実感」
斉藤　喜代司



写真川柳

（敬称略）

東西の　恋路をつなぐ　渡し船
井口　昌一

開国の　歴史が似合う　愛宕（あたご）山
角田　誠

親鸞の　教えに帰依し　乗誓寺
城　春美

頼朝の　願いが叶う　浦賀村
木村　紀夫

役目終え　寡黙に再生　待つ錨（いかり）
斉藤　喜代司

東福寺

船員の　命を願う　観音堂
山田　良夫

浜町の　漁民を守る　虎踊り
鈴木　明

これ見ると　巨大造船　目に浮かぶ
小俣　健

栄光が
ドライドックに
ある歴史
小田　浩

この道も　多くの人の過去を知る
斎藤　節子

初恋の　人を訪ねて　百千里
杉田　禮子

修験の　汗を流した　八雲堂
和泉沢　宣子

頼朝の　復興願う　石清水
青木　節子

横須賀の近代歴史遺産 ―日本の誇り体感シンポジウム―

平成25(2013)年10月12日(土)に浦賀ドックでレンガドック活用イベントを行いました。午前は川間と浦賀ドック内に残る2基のレンガドックの見学会、午後は機関工場で横須賀市近代歴史遺産活用事業と協働したシンポジウムを開催しました。ここでは横須賀に残る近代歴史遺産の価値を考える基調講演とパネルディスカッションの内容の一部を紹介します。

基調講演 「近代化遺産を活かしたまちづくり」

近代化遺産は日本の近代化に貢献した産業・交通・土木遺産を指す用語です。

レンガの塀に耳を澄ませる!

私たちの身の回りには、たくさんの近代化遺産があって、その恩恵にあずかって生活しています。概念としては、造られてから50年経ったものは文化財であり、近代化遺産ともいえます。そのまちらしさを大切にして生かすことでまちづくりの取り組みを進めている例が全国にたくさんあります(右コラム参照)。

イギリスでも、「レンガの塀からのささやきに耳を澄ませて歴史を読み取れ」という教えがあります。昔の人と共に歴史を重ねてきた塀はその時代を語りかけてくる、というたとえです。近代化遺産のあるまちでは、住民が地域や歴史を語ることで誇りに思えるようになるのです。このようにして、市民が参加するまちづくりになっていきます。

このシンポジウムの会場となっている浦賀ドックをはじめ、横須賀には多くの近代化遺産があります。実は、横須賀は日本の近代化に大きな役割を果たしてきたのです(本ページ下段参照)。市内に残されているものからその功績をうかがうことができます。こうした近代化遺産について、市民の皆さんと専門家、行政が共に語り合って、横須賀のまちづくりに生かしていくことが大切です。

公益社団法人横浜歴史資産調査会
常務理事
米山　淳一さん

例えば……北海道上士幌町のコンクリートアーチ

昭和12(1937)年、地域産業や林業のために国鉄士幌線が敷設され、コンクリートのアーチが架けられました(写真右下)。この鉄道と林業がまちを発展させてきました。その後、国鉄が民営化されてJRになる時、日本国有鉄道清算事業団がこのアーチを巨額の費用を掛けて撤去しようとしました。

その時、まちをつくってきた鉄道と林業を象徴するこのアーチを守ろうと地域住民が動きます。撤去費用を地域に提供してくれれば地域で守ると交渉し、そのとおりになりました。

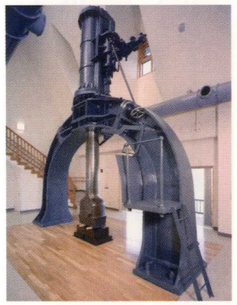
今では背後の大雪山にある糠平温泉とこのアーチを組み合わせて旅行のツアーにするなど、地域活性化が図られています。

写真:米山 淳一

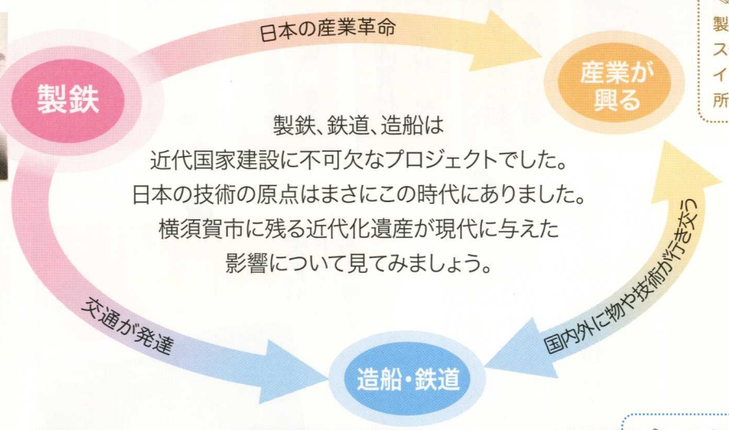
近代化の始まりは横須賀から

■横須賀製鉄所

『横須賀海軍船廠史』



■スチームハンマー(ヴェルニー記念館で展示中)
(慶応元(1865)年)



✎メモ:建物の設計は、横須賀製鉄所の技師オーギュスト・バスチャン。製糸場で使用するボイラーやタンクも横須賀製鉄所で造られました。

■富岡製糸場(明治5(1872)年)
[写真所蔵:横須賀市総務部総務課市史編さん係]

■浦賀ドック(明治32(1899)年)

■横須賀線田浦隧道(明治22(1889)年～大正初期)　写真:米山 淳一

■京浜急行電鉄の橋梁(横須賀中央駅)

✎メモ:「京浜急行電鉄」の前身の一つ「湘南電気鉄道」の橋梁は、その大半が昭和5年ごろ浦賀ドックで造られ、現在も使われているものがあります。

パネルディスカッション

近代歴史遺産を保存することの難しさと、その価値について考えるパネルディスカッションを行いました。

コーディネーターには郷土史家の山本詔一さん、パネリストに米山淳一さん、毎日新聞学芸部記者の栗原俊雄さん、市民ボランティア団体「ドックと浦賀の歴史を愛する会」の阿部洋治さんを迎えました。

基調講演の演者
●米山 淳一さん

企業の株主やトップが近代化遺産を有効活用しようと意識することで
社会と企業両方の利益につながることもあります

写真:米山 淳一

旧横浜船渠第2号ドック
ドック底部は広場として、側面の内部は店舗として有効活用されています

浦賀工場内のレンガドックと機関工場

全国の遺跡を取材行脚
●栗原 俊雄さん

企業にとっては近代歴史遺産を保存することによるインセンティブ(誘因)がないと難しいのです
行政や住民が残すだけの価値をつくることが必要です

浦賀ドック産業遺産見学会のガイド
●阿部 洋治さん

地域の人が責任を持ってまちの歴史をつなげていかないといけません
近代歴史遺産の保存というと大げさに思うかもしれませんが
浦賀の『まちの記憶』を残そうとしているだけなのです

コーディネーター
●山本 詔一さん

近代や地域の歴史を子どもの頃から深く学ぶことが
保存の価値を創出するきっかけになるかもしれません

会場内では、福祉施設「あすなろ学苑」と「かがみ田苑」による軽食販売もありました。

当日の詳しい内容を『レンガドック活用イベントブックレット』にまとめています。市内の各図書館、コミュニティセンターでご覧になれます。

うらが今昔 5

大黒屋 臼井儀兵衛

郷土史家　山本詔一

慶応4（1868）年閏（うるう）4月11日(注)、浦賀奉行所は新政府軍によって接収された。奉行所に勤めていた役人たちは、速やかに役宅（官舎）から退去するよう求められた。

▌中島三郎助と大黒屋・臼井儀兵衛

役宅は、浦賀の奉行所が置かれて以来、役人とその家族が居住する場所となっていたため、新政府軍からの要求には中島三郎助の一家も途方に暮れた。ましてや主人の三郎助は国事に奔走（ほんそう）していたため留守であり、長男・恒太郎が月番与力として新政府軍への役宅の引き渡し業務を行わなければならなかった。結局、中島一家は他の幕臣と共に静岡へ行くことになるが、中島は妻・すずに対して「物乞いをしてでも生活せよ」と告げたという。

このような状況のなか、中島家に献身的な援助を続けた人物がいる。西浦賀の商人で大黒屋の臼井儀兵衛であった。なぜ大黒屋が中島家に援助をしたのか。それには、こんな所以（ゆえん）があると伝えられている。中島が水戸藩の軍艦・旭日丸の建造に多大な尽力をしたので、水戸藩は褒賞を与えようとした。しかし中島はそれを断った。その代わりとして、水戸藩に入る塩を浦賀の商人に任せてほしいと言ったのである。この塩の商いをするようになって、大黒屋が浦賀にとどまらず三浦半島随一の大商人になったとされる。

明治20年代に入ると、旧幕府の人々の名誉回復に向けた動きが見られるようになった。明治23（1890）年、臼井を筆頭に35人の奉行所関係者や商人が発起人となり、多くの賛同者を得ながら「中島三郎助招魂碑（しょうこんひ）」の建碑活動が始まった。翌24（1891）年7月、大黒屋が所有していた陣屋山（愛宕山（あたご））に招魂碑が完成することとなった。この時から愛宕山は「浦賀園」として開園し、横須賀市内最古の公園として今に至る。

招魂碑の材料は、大黒屋が宮城県石巻から取り寄せた稲井石（いないいし）の自然石で、高さ440㌢、幅150㌢以上ある大きなものだった。篆額（てんがく）（石碑に書かれる題字）は榎本武揚が筆をとり、碑文は後に明治政府で外交官として活躍する田辺太一が著した。この招魂碑の除幕式がきっかけとなって、三郎助の意志を継いだ「浦賀船渠（せんきょ）」が誕生することとなる。

▌栄枯盛衰

浦賀船渠株式会社は当初、榎本武揚と逓信（ていしん）省の管船局長・塚原周造、中央気象台長・荒井郁之助、緒明（おあけ）菊三郎、臼井儀兵衛の5人が資金を出し合って資本金50万円規模の合資会社とする予定であった。ところが、浅野セメント・浅野総一郎、安田財閥・安田善四郎、国立二十七銀行・渡辺治右衛門、海軍機関大監・渡辺忻三（きんぞう）などが資本参加し、急きょ資本金100万円とすることとなった。臼井は、浦賀船渠株式会社の創業時、緒明、浅野、榎本に次ぐ4番目の大株主となり、監査役の職に就いた。

明治32（1899）年、臼井は高額納税者の証しとして貴族院議員に勅選され、明治35（1902）年に浦賀銀行を興し、頭取として活躍するまでになった。明治37（1904）年11月に58歳で死去したが、悪いことは重なるもので、日露戦争の戦費の捻出のため塩が専売制に変更された。大黒屋は大きな打撃を受け、あらゆる販路を求めたが次々に失敗し、ついに倒産することとなった。大黒屋の倒産は浦賀の町に大きな影響を与えた。町じゅうに沈滞ムードが漂い、脱却するのに数年の時を要したという。

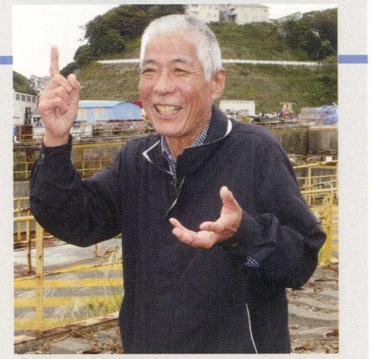
中島三郎助招魂碑

（注）閏とは……当時使われていた太陰太陽暦では、現在の太陽暦の1年より約11日短くなる。暦と季節のずれを修正するため、閏月を入れて1年を13カ月としていた。

ドックのお話⑤

昔、ドックで働いていた方へインタビュー

前号では、原寸大で船の全部の図を描いて現場に指示する『現図』の仕事を紹介しました。今号はその次の工程で、現図を船の材料となる鉄板に書き入れる『マーキン屋』について、道村重信さんにお話を伺いました。



道村　重信さん

――入社のきっかけは？

中学3年生の夏ごろ、浦賀ドックで初めて進水式を見ました。船台から船を海に滑り降ろすと観客から大きな歓声が湧き上がり、その迫力に感激しました。

この時の印象が強く、中学校を卒業した昭和29（1954）年、浦賀ドックに入社しました。3年間は「浦賀造船所技能者養成所」に通い、その後、船殻科に配属され「マーキン屋」として働きました。

――マーキン（罫書（けがき））とは印を付けるような仕事なのですか？

現図場から届く寸法図や型紙を、船の材料となる鉄板にポンチで印を付けて手作業で書き入れます。寸法表を使うこともありましたが、曲線部分は特に慎重さと技術が求められるので、木型を当てて書いていました。材料の無駄をなくすため、切り出した後の鉄板の余りの率を5㌫に下げることを目標にしていました。

マーキン作業をした第1内業工場の前で

長さ100㍍を超える工場の床で1班10～12人で3～4人ごとのグループに分かれ、1日中しゃがんだまま仕事をしました。船のブロック単位で取り組み、長さ6～12㍍×幅1.5～2.4㍍の鉄板を1日に7～8枚書きました。一隻で3～6カ月かかる作業になります。

造船は他の製造業と違った技術を使用するため、図面も独特なものになります。商船の図面は英語で書かれていたので、専門的なことに限られますが、読むことだけはできるようになりました。

――チームワークで仕事が進められていたのですね。その中で一番うれしかったことは何ですか？

マーキン屋として働き始めた頃は先輩が付いて教えてくれましたが、5、6年して一人で作業ができるようになった時は本当にうれしかった。ただ夢中で仕事をしていたら、いつの間にかできるようになっていました。後に電子罫書写真装置（EPM）が導入されましたが、当時はすべて手作業だったので、精度を大切にしました。きちんとやらなければ次の工程で迷惑を掛けてしまいますから。

――特に印象に残る仕事はありますか？

日本初の大型高速帆船の練習帆船「日本丸」と、姉妹船の「海王丸」を建造したことです。船体には、銘板といって製造した造船所の名前を打ち付けます。工場は閉鎖されても、浦賀ドックの名前がこれらの船と共に残されていくのが誇りです。

――浦賀ドックの名前が世界の海を巡るのですね。集中力が必要な仕事だったと思いますが、息抜きはどのようにしていましたか？

マージャンが流行（はや）っていて私も覚えました。マージャンを知らないと娯楽の輪から取り残されてしまうほどでした。想像がつかないかもしれませんが、東岸の造船ビルの3階には銭湯のような大きな風呂もありました。仕事の後、みんなで風呂に入り汗を流してから帰りました。今に比べると娯楽の少なかった時代ですから、こうして同僚と一緒に何かをすること自体が楽しかったですね。

造船ビルの前で

うらうら散歩 その3

レンガドック横にある浦賀コミュニティ広場の向かい側に酒店「吉田商店」があります。三代目店主の吉田寛さんに進水式の時の様子や終業後の浦賀ドック従業員の横顔などをお聞きしました。

吉田　寛さん

進水式で実際に使われた船名入りの升。右下は鋼球。進水台の上に置かれ、船がその上を滑って進水するものです。

明治に創業

吉田商店の創業は明治時代。米、味噌、酒などを販売し、後に立ち飲み業も始めるようになりました。浦賀ドックの周辺には福利厚生施設のクラブがあり、毎日のように食品や酒類を配達していたそうです。小学生の頃から二代目店主のお母さんを手伝い、大学卒業後に吉田さんが三代目を任せられました。

華やかな進水式

建造中の船を初めて海に浮かべる時にはセレモニーとして進水式が行われます。その日には浦賀ドックが多くの見物客でにぎわいました。発注者である船舶会社の代表者などが、船から伸びた支網と呼ばれるロープを切断します。支網にはあらかじめシャンパンがつながれていて、切断されると船首に当たって割れます。同時にくす玉から紙テープや紙吹雪が舞い散り、船が海へと進水していきます。進水式が終わると場所を変えて関係者によるパーティーも開かれました。

吉田さんはこの舞台に関わっていたものの、ほとんど式を見ることなく奔走していました。進水式の飲み物や樽酒を納入していましたが、配膳や後片付けはもとより、贈答用の花束、自作の紅白リボン飾り、イセエビなどの食品も調達していました。夏場は冷たいビールを大量に提供するため、パーティーの直前に一気に会場へと運び込むのに苦労をしたとのこと。「船が進水する瞬間を見られなかったのは残念」と吉田さん。でも、舞台裏を支える一助になれたことの充実感が胸にあふれていたようです。

お客さんがあふれる浦賀駅前通り

浦賀ドックへの納品のほか、立ち飲み業も営んでいました。浦賀ドックの従業員の皆さんが仕事帰りに来店し、特に今から40年ぐらい前はお客さんが道路まであふれるほどだったそうです。「川間地区に住むお客さんのなかには、通勤門（現在の生協前）からわざわざ駅前まで行き、当時7軒あった立ち飲み屋で1杯ずつ飲み歩きをして自宅へ帰る人もいましたよ」と顔をほころばせる吉田さん。店では注文ごとに支払いをするシステムになっていますが、お釣りを渡すまでの間に飲みきってしまう人もいたとか。たいていは課や係単位で飲みに来て仕事の延長の話をしたり、他の部署の人と議論をしたりといったことが多く、浦賀ドックで働く人たちの仕事熱心さを感じていたとのこと。今も立ち飲み屋を続けていて、常連客のなかには当時の浦賀ドック従業員の方もいるそうです。

イベント情報

第39回レンガドック活用イベント

咸臨丸フェスティバルに参画

入場自由

2014年4月26日（土）

①ワンデーミュージアム
時間：10:00～16:00
場所：（仮称）ミュージアム・パーク推進センター
内容：『帆船日本丸の進水式』ほか DVD上映会、咸臨丸子孫の会と語らう場 など

②産業遺産見学会
時間：第1回　13:00～13:45
　　第2回　14:00～14:45
場所：レンガドック周辺

③産業遺産でコンサート
時間：13:45～16:00（予定）
場所：機関工場内
出演：三浦学苑高校吹奏楽部、浦賀中学校吹奏楽部

④咸臨丸パネル展示＆浦賀ギャラリー
時間：10:00～16:00
場所：機関工場内

ご意見、ご感想もお待ちしています！

発行　レンガドック活用イベント実行委員会
編集　レンガドックかわら版編集部
お問い合わせ　レンガドック活用イベント実行委員会事務局
（横須賀市 都市部 市街地整備景観課内）
〒238-8550 横須賀市小川町11
電話 046-822-8526　FAX 046-826-0420
E-mail keikan-ci@city.yokosuka.kanagawa.jp

- 本誌『レンガドックかわら版』は、浦賀行政センターなどに置いてあります。
- 次号は平成26（2014）年10月1日発行予定です。